城北小

主体的に学び、考えを深める子の育成

～対話的な授業づくりを通して～

（３年計画の１年次）

校長　　出　貝　　幸　浩

１　研究主題について

(1)教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「考えを表す子」「きたえる子」の徳・知・体の柱を掲げ、「学ぶ意欲」と「豊かな心」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、課題意識をもって主体的に学習に取り組み、他者と関わり合いながら協働的に学習を進め、自分の考えを深めていくことが必要になると考えた。

(2)研究の経過から

昨年度は、３年計画の３年次として「自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成」～学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫～という研究主題のもと、教材や発問を工夫し、ネームプレートや挙手などで立場の表明をさせたことにより、一人一人に問いを意識させ、必要感をもたせて課題解決に向かわせることができた。また、導入で課題意識をもたせたことで、その後の学習過程においても意欲を持続させ、学びに向かわせることができた。さらに、実際の操作や文章へのしかけ、全体でやり方を確認するなど、様々な手立てを段階的に講じたことによって、自信をもって課題に取り組ませ、子どもの思考を活性化させることができた。

今年度は、昨年度までの研究を生かしつつ、対話的な授業づくりを通して、児童の考えを深めるための手立てについて研究を進めてきた。課題設定の場面では、自分自身の問いへとつなげるため、教材へしかけをすることによって立場の表明をさせ、児童を主体的に学習へ向かわせる工夫を授業に盛り込んだ。また、展開場面では児童の実態に合った対話的活動を通して、児童一人一人が考えを表し、自分の学びを深められるように手立てを講じ、実践を重ねた。

２　研究のねらい

主体的に学び、考えを深めようとする児童を育てるための指導の在り方を、授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

課題設定や対話的活動を工夫することによって、自分の考えをもち、考えを深めようとする児童を育成することができる

４　研究内容

〇主体的に学び、考えを深めようとする児童を育成するための効果的な指導の在り方

・課題設定の場面で子どもの思考から問いにつなげる工夫

・対話的活動の中で自分の考えを表す工夫

５　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者・講師・授業の概要
１０	１８	中学年ブロック　３学年　国語：「すがたをかえる大豆」　　教諭　秋元　晶子
		前時に考えた問いがどこに入るのか発問することによって、児童に段落前後の内容や根拠となる言葉を探す必要感をもたせることができた。また、立場の相違や変容を可視化させたことで、意欲を持続させながら学習に向かわせることができた。

１０	２６	高学年ブロック　５学年　国語：「固有種が教えてくれること」　　教諭　永田　進斗
		資料のしかけによって、思考のずれを生じさせ、児童に文章を読む必要感をもたせることができた。また、段階的に対話的活動を組み込み、その都度考えを記入させたことで、児童一人一人の考えを深めさせ、変容を見取ることができた。
１１	１６	低学年ブロック（要請訪問）１学年　算数：「もののいち」　　教諭　福田　新子 講師：八戸市教育委員会　総合教育センター　小向　一樹　主任指導主事
		問題を段階的に提示したことで、児童に本時のねらいとする視点に目を向けさせ、目的意識をもたせることができた。ブロック操作やジャムボードの活用によって、思考の過程や考えの相違が明確になり、対話が生まれ、自分の考えを深めさせることができた。

(2) 一般研修

月	日	一　般　研　修
５	２４	個別な配慮を要する児童の理解及びいじめ対応に関わる研修 担当：本校教諭　熊谷　恵美子　　小笠原　真一
５	３１	問題解決的な学習について、今年度の重点と対話的な学習の授業展開について 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　中村　美穂　主任指導主事
６	２１	職員間の学び合い～授業実践報告①～ 担当：本校職員
７	１９	生徒指導と問題行動との関わり、特別な支援を要する児童への手立て 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　青少年Ｇ　石田　純也　主任指導主事
９	５	通常学級における不適応児童に対する適切な対応について 講師：立教大学　教授　大石　幸二　氏
１１	１	職員間の学び合い～授業実践報告②～ 担当：本校職員
１２	２０	職員間の学び合い～授業実践報告③～ 担当：本校職員

６　研究の成果

(1) 教材、発問の工夫などの課題提示のしかけ、立場の表明をさせたことにより、友達とのずれや予想とのずれ、既習とのずれが生じ、一人一人に問いを意識させ、必要感をもたせて課題解決に向かわせることができた。また、立場の表明を複数回行ったことで課題解決に向かう意欲を持続させることにつながった。

(2) 自分の考えをノートやワークシートに記入させてから交流させたり、実際に操作させたりと様々な手立てを講じたことによって、考えを表すことに自信をもたせることができた。また、段階的に対話的活動を組み込んだことによって、意欲的に課題解決へと導くことができ、児童の考えを深めさせることにつながった。

７　研究の課題

(1) 子どもの思考から問いにつなげるには、導入段階で立場の表明をさせ、問いを全体で共有し、展開へとつなげていくことが有効であると明らかになった。自分事の問いへとつなげるため、立場の表明のさせ方や問いを焦点化・明確化する工夫などについては引き続き検討していく必要がある。

(2) ワークシートに記入させたり、実際に操作させたりすることで自信をもって自分の考えを表し、学習に向かわせることができると明らかになった。しかし、学習場面に応じた対話的活動のもち方や対話的活動から考えを深める手立てについては今後も研究していく必要がある。

（記入者　　馬場　知里）